栗東歴史民俗博物館

収蔵品展「栗東の歴史風土をさぐる－金勝寺文化圏の諸像－」

平成23年9月17日（土）～平成23年10月23日（日）

ご あ い さ つ

栗東市は滋賀県の東南部に位置します。市南部の金勝山にある金勝寺は、現在は天台宗に属しますが、奈良時代に東大寺にゆかりの深い良弁によって開かれ、平安時代はじめの弘仁年間（八一〇～二四）に奈良興福寺の僧願安によって伽藍が整備されたと伝えます。かつては興福寺にゆかりの深い寺院として、湖南から湖東にかけて大きな求心力を持ち、当地域の仏教文化の一つの核となっていきました。金勝寺をとりまく地域は、とりわけ金勝山北麓を中心に古像を多く伝え、金勝寺を中心に仏教文化が栄えたと考えられることから「金勝寺文化圏」とも称されてきました。

金勝山の尾根筋に出ると、琵琶湖とその対岸の湖西の山々を見渡すことができます。中でも、ひときわ高く見えるのが比叡山です。大陸に渡って天台の教えを持ち帰った最澄は、この比叡山に延暦寺を開き、延暦二十五年（八〇六）に桓武天皇の勅許を得て天台宗を開きました。

天台宗が近江全域に影響力を拡大していくのは十世紀半ば頃からのことです。金勝寺とその周辺にも、十世紀末ごろより天台の影響をうかがわせる彫像の作例が見られるようになり、当地域における天台勢力の進展の様相をうかがうことができます。

本展では、湖南地方を代表する古刹である金勝寺と、金勝寺を中心に栄えた「金勝寺文化圏」とも称される仏教文化の広がりについて、栗東市内外の寺社からご寄託いただいている彫像を中心に紹介します。当地域の豊かな仏教文化に触れていただければ幸いに存じます。

平成二十三年九月
栗東歴史民俗博物館

解説集

〇金勝寺四至絵図（複製）　　1 鋪

原品：紙本墨画　縦 97.5 ㎝　横 111.5 ㎝

桃山時代（16 世紀）　金勝寺（栗東市荒張）

金勝寺の四至を定める天暦 8 年（954）の官宣旨と伝える文書の内容を絵図化したもの。金勝寺を南側から描き、麓を流れる大戸川を中心に、北は現在の国道 1 号線辺りまで、南は信楽を走る現在の国道 307 号線の周辺までを描く。

艮（北東）、巽（南東）、坤（南西）、乾（北西）の境と、それらを結ぶ境界線を朱で示すが、これは北では後世の金勝村と治田村、葉山村の境にほぼ見合い、北東から東では、かつて栗太郡に属した金勝庄と、甲賀郡に属した檜物庄の境にあたっている。これは、中世から近世にかけての庄園や村の境界意識を濃厚に反映している。

金勝寺は初期の段階から北麓(ほくろく)との関わりを強めた。それは、金勝谷に残る古像の多さにも示されている。また、本図でも東西参道の麓を意味する「西坂本」「東坂本」の地名を記すことから、北麓の東西の参道が成立した後の風景を描いている。

その一方で、本図では伽藍をあえて南から描き、四至で定める以上に南側が広く描かれている。これは、紫香楽宮の旧跡付近まで視野にとらえ、金勝寺を南都や信楽と関連づけようとする意識を反映したものと考えられる。

本図は、“現状において金勝寺とかかわりの深い地域”と“本来金勝寺とかかわりが深くあるべき地域”という 2 つの意識が重なり合って描かれたものと言えよう。

〇金勝寺本堂再建勧進状　　1 巻　　（栗東市指定文化財）

紙本墨書　縦 32.5 ㎝　横 188.9 ㎝

天文 18 年（1549）　金勝寺（栗東市荒張）

天文 18 年（1549）の火災で焼失した金勝寺の本堂を再建するため、勧進をつのるもの。冒頭には聖武天皇の御宇に良弁僧正によって建立されたこと、真言、天台の教法を兼習して鎮護国家を祈ってきたことなどが述べられる。幸い本尊釈迦如来をはじめとする尊像は焼亡を免れたといい、現在の本堂本尊釈迦如来坐像がこれにあたる。

金の界線を施し、上下に金銀砂子、野毛、切箔をあしらう。1 紙あたり 13 行、1 行あたり 10〜14 字を配する。寺伝には青蓮院尊朝法親王（1552〜97）の筆と伝えるが、残念ながら時期的に合致しない。

〇木造薬師如来坐像　　1 躯

像高 85.2 ㎝　平安時代（12 世紀）

成谷寺　（栗東市荒張）

――

金勝山北麓にある成谷寺の本尊。ヒノキ材で、両耳の後ろを通る線での一木割矧造り、割首、漆箔。肉髻の頂部と後頭部の矧寄せ材を失い、また幾度かの修理により手を加えられた部分もあるが、平安時代後期の穏やかな作風をよくうかがわせる。金勝谷に多く伝わる薬師如来像の中でも美作のひとつである。

〇木造天部形立像　　1 躯分　　（滋賀県指定文化財）

像高 106.0 ㎝　平安時代（12 世紀）

金勝寺（旧山口寺）伝来　（栗東市荒張）

――

平成 4 年（1992）に当館が山口寺で行った調査では、須弥壇の下から四天王像の部材が多数見つかった。組み合わせると、本像および 1 対となる木造四天王立像 2 躯になることが判明した。

本像は、左頭部、右頭部、左体部前面、左体部背面、右体部、右腕の 6 つの部材を仮組みしている。左右の鎧の形や位置、内刳りを施した材の厚さに至るまで、ほとんど寸分たがわず組み合わされているが、頭部の左右を接合するほぞ穴の位置が異なることなどから、本来は一具をなす天部像のうち、少なくとも 2 躯以上の別像の部材が残ったものと考えられる。丸みを帯びた造形は的確で、仏師の技量の高さがうかがえる。

※木造四天王立像 2 躯は第 1 展示室で展示しています。

〇木造毘沙門天立像　　1 躯　　（重要文化財）

像高 102.8 ㎝　平安時代（12 世紀）

西遊寺（木川薬師堂）（草津市木川町）

――

頭部・体部を通してヒノキの一材から造り、内刳はない。両手は、それぞれ肩、手首で矧ぐ。左手を屈して宝塔を捧げ、右手に戟を執る一般的な毘沙門天像の姿をとる。動きの少ない、平安時代後期の穏健な作風を持ち、足下に踏まえる邪鬼・岩座まで当初のものを伝えているのは貴重である。

本像は、木川薬師堂の本尊薬師如来坐像を挟んで安置される 2 躯の毘沙門天像のうち 1 躯である。木川薬師堂は江戸時代には毘沙門堂と呼ばれており、本像はかつての本尊とも推測される。

○木造毘沙門天立像　　1 躯

像高 97.8 ㎝　鎌倉時代（13 世紀）

西遊寺（木川薬師堂）（草津市木川町）

―――

木川薬師堂の本尊薬師如来坐像を挟んで安置される 2 躯の毘沙門天像のうち 1 躯である本像は、もとは同じ木川町内にある天神社に安置されていた。明治初年の神仏分離によって、毘沙門堂（現在の木川薬師堂）に移されたと考えられる。

本像は寄木造で、頭部および体部それぞれ前後に 2 材を矧ぎ寄せている。

○木造天部形立像　　1 躯　　（東近江市指定文化財）

像高 88.3 ㎝　平安時代（11 世紀）

春日神社　（東近江市小八木町）

―――

ヒノキまたはカヤの一木造(いちぼくづくり)で、内刳りはない。頭頂を通る像の中央に木心を込める。

やわらかで量感のある肉付きの中に、やや寸詰まりながら破綻のない造形を見せる。本像のような力強さと温厚さが共存するような表現は、10 世紀後半から 11 世紀のごく早い頃に好まれたものである。手慣れた彫り口からは、中央と関わりのある優れた仏師(ぶっし)によって造られたことが想像される。

本像は、境内の御輿倉に保管されていた。江戸時代までは神社に関連する仏堂に安置していたものを、明治初年の神仏分離の際に倉にしまい込んだのだろう。

○木造毘沙門天立像　　1 躯

像高 85.4 ㎝　平安時代（11 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

―――

螺髪を表し、小ぶりの頭部、丸みを帯びて張った腰などから、11 世紀半ば頃の造像と考えられる。上歯を表して下唇を噛む姿は比較的珍しい。小像ながら造形は的確で、洗練された作風をみせている。左手に宝塔を捧げ、右手に戟を持つ毘沙門天として伝えられたが、両腕は稚拙な後補であったため現在は取り外されている。

ヒノキ材による一木からなり、内刳りは施さない。表面は焼け肌を見せる。同寺の他像も火災に遭った形跡を残すが、いつの時期に被災したものかは不明である。

○木造地蔵菩薩半跏像　　１躯

座高 56.6 ㎝　平安時代（12 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

―――

頭部は耳後ろで前後矧ぎとし、頭部前面のみ当初の材を残す。体部はすべて後世の補作にかわるため、当初から現在のような半跏像(はんかぞう)であったかは不明である。全体に矧目(はぎめ)が緩み、後補の漆箔に覆われていたが、修理によって後補の仕上げが取り除かれ、当初の造形がうかがえるようになった。

比較的保存状態のよい顔の左半分や耳などからは、手馴れた彫り口がうかがえる。

半跏の地蔵は平安時代後期以降、盛んに制作された。しかし本像を含め、栗東に伝来する半跏の地蔵はいずれも体部が後補であり、当初の様相は知り難い。

○木造地蔵菩薩立像　　１躯

座高 92.5 ㎝　平安時代（11 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

―――

左手に宝珠をもち、右手には錫杖（亡失）を執る。地蔵菩薩の手勢はこれに限るものではないが、本来僧侶が行脚のために用いた杖の一種である錫杖を手にすることは、六道をあまねく巡って衆生を救済する地蔵菩薩の性格をよく表現している。

頭部･体部を通して一木から彫出され、内刳りを施す。地付きが若干切り詰められており、本来はもう少し足元の伸びやかな造形であったものだろう。着衣には矛盾もあるが、丸く膨らんだ腹や胸の肉取りや脚部の衣文などに古様を示す一方、目鼻立ちは小ぶりになることなどから、11 世紀の作と判断される。

○木造薬師如来坐像　　１躯　（重要文化財）

像高 139.8 ㎝　平安時代（12 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

―――

薬師堂の本尊。平安時代後期の穏やかな作風をみせ、半丈六という大きさがありながら、頭部･体部を通して木心をほぼ中央に込める一材から彫出し、背刳りを施す古様な構造をとる。近隣の薬師寺にも類似した作例が見られ、寄木造の技法が確立して後も一木造的な発想が残っていた様子がうかがえる。

栗東周辺では 10 世紀末頃から薬師如来坐像の作例が多く残され、天台勢力の伸展の様子を反映すると推測されてきた。早い例は東方寺（栗東市小柿）や蓮台寺（栗東市下鈎）など琵琶湖寄りの平野部にあり、本像をはじめ南部の山間部には、それより少し遅れて見られるようになる。

○木造日光菩薩立像　　1 躯　　（栗東市指定文化財）

像高 160.4 ㎝　平安時代（11 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

――

木造薬師如来坐像の左脇侍として安置される。

足首をあらわにした軽い裾さばきをみせるなど、月光菩薩との造形の差が感じられるが、鏡餅のような形状の単髻、なで肩ですらりとした体形、腰から膝への動きなどには共通する感覚がある。同寺の地蔵菩薩立像などとともに、同じ系統の仏師によって作られたものであろう。

頭部(とうぶ)･体部(たいぶ)を通して一材から彫出し、内刳りは施さない。

○木造月光菩薩立像　　1 躯　　（栗東市指定文化財）

像高 168.3 ㎝　平安時代（11 世紀）

善勝寺　（栗東市御園）

――

木造薬師如来坐像の右脇侍として安置される。

腰高ですらりとした造形を見せ、浅く彫られた衣の表現にも工夫が凝らされる。天衣の布端を波打たせるような装飾性や、同心円状に二重の渦を描く珍しい耳の形は、同寺の地蔵菩薩立像にも見られ、同じ系統の仏師によって作られたと思われる。いわゆる地方作的な様相も見せるが、衣のつけ方などには古像を学んだことがうかがわれ、頭部の側面観などにも、優れた技量がうかがえる。

頭部･体部を通して一材から彫出し、内刳りは施さない。

○熊野神社本地仏像　　6 躯　　（草津市指定文化財）

平安時代（12 世紀）

熊野神社　（草津市平井町）

――

本地仏とは、日本の神と仏教の仏は本来同一の存在であるとする考えのもと、神々を仏の姿で表現したものを指す。

熊野神社本地堂には、等身の薬師如来坐像を中心として、千手観音、阿弥陀如来（2 躯）、十一面観音、地蔵菩薩（2 躯）、毘沙門天、不動明王の計 8 躯の三尺の立像からなる熊野の本地仏が配される。そのうち、毘沙門天と不動明王は作風を異にするが、ここに展示する 6 躯は基本的には両耳の後ろから体側を通る線にて割矧ぎ、割首となり、薬師如来坐像とともに創建の伝をさかのぼる平安時代後期の作と見られている。

社寺紹介

〇金勝寺　(栗東市荒張)　天台宗

東大寺初代別当として知られる良弁を開基と伝え、平安時代初頭に奈良興福寺の願安により伽藍が整備されたと伝える。天長 10 年 (833) には定額寺に列せられ (『続日本後紀』)、寛平 9 年 (897) には年分度者 2 名を賜っている (『類従三代格』)。一時は興福寺ゆかりの寺院として近江湖南から湖東を中心に大きな影響力を持ったとみられる。

11 世紀には金勝寺周辺にまで天台宗の影響が及びはじめ、15 世紀半ばごろには天台宗と真言宗が混在していたという (菅家本『諸寺縁起集』)。

天文 18 年 (1549) には本堂が焼失するなど、中世末期には往時の勢いを失っていた。江戸時代には、宝永 2 年 (1705) に京都山科毘沙門堂の末寺となったことが知られ、天台宗一宗に定まっている。

〇成谷寺　(栗東市荒張)　天台宗

金勝寺から北麓に向けて東の参道を下った金勝谷の上部に位置する成谷の集落内にある。

『興福寺官務牒疏』には仁寿 2 年 (852) 金勝寺安願の開基、金勝寺二十五別院のひとつ鳴谷寺として記載される。「安願」は弘仁年中 (810～24) に金勝寺の伽藍を整備した「願安」のことを指すのだろう。

正徳年中 (1711～16) に僧圓誉が中興して浄土宗となったというが、現在は天台宗に属している。

〇旧 山口寺　(栗東市荒張)

金勝寺へと続く西参道の尾根筋の先、金勝谷に所在した。創建年代は明らかではないが、平安時代以来の古像をまつり、境内には鎌倉時代とみられる石造宝塔なども残されていた。

大正 15 年 (1926) に発行された『近江栗太郡志』には、現存する地蔵菩薩坐像や四天王立像などのほか、平安時代半ばに遡ると見られる薬師如来坐像の図版が掲載されている。この像は現存しないが、金勝谷に伝来する薬師像としては、確認できる最古の像である。

山口寺が廃寺になると、重要文化財の地蔵菩薩坐像をはじめとするゆかりの諸像は金勝寺へと移された。

〇西遊寺 (木川薬師堂)　(草津市木川町)

草津市木川町に所在する薬師堂は、江戸時代には毘沙門堂と呼ばれ、鎌倉時代の木造薬師如来坐像と 2 躯の毘沙門天立像を祀っていた。うち 1 躯が神仏分離以前には木川天神社に安置されていたといい、天神社の本地仏であった。

天神社は、大宮若松神社 (草津市南山田町) とともに、『興福寺官務牒疏』に金勝寺の二十五別院の 1 つとして記される金峰山寺の鎮守とされてきた。薬師堂の地は、金峰山寺の旧地である

とも伝えられ、薬師如来坐像や毘沙門天立像は金峰山寺の遺像とも考えられる。

○春日神社　(東近江市小八木町)

創建年代は明らかではないものの、当地が奈良興福寺の寺領であったことから、春日大社の分霊を勧請したのが始まりと伝わる。現在の本殿は文安元年(1444)に建立されたものである。

古くから神仏習合し、宝篋印塔や鐘楼、神門、懸仏、大般若経など、往時をしのばせる文化財が伝えられている。また、境内周辺は白鳳期(645～710)に創建された古代寺院の跡地(小八木廃寺跡)とされ、礎石や瓦が発掘されている。

○善勝寺　(栗東市御園)　浄土宗

近世の寺伝によれば、貞元 2 年(977)勝光法印の開創というが、近世初頭には衰退しており、寺歴に関わる同時代の文献資料は残されていない。いずれにしても、金勝谷のふもとを流れる金勝川を望む高台に立地する当寺は、金勝寺の濃厚な影響のもとで仏教文化が育まれた地域に含まれており、その寺歴も、このような地域の性格と無関係ではありえなかったと考えられる。

11 世紀ごろには、比叡山の影響が及ぶようになり、当寺も天台宗に属したと考えられるが、17 世紀後半に善誉等順によって再興された後は、浄土宗寺院として今に至っている。

本尊である千手観音立像をまつる本堂に隣接して薬師堂があり、薬師三尊像が安置されていた。境内には鎌倉時代ごろの作とみられる石造宝塔なども残されている。

○熊野神社　(草津市平井町)

社伝によれば、建保 6 年(1218)に佐々木信綱が神託をこうむり、熊野より勧請したとされる。その後、天正 7 年(1579)に兵火にかかって焼失したが、平井加賀守基綱によって再興された。再興の際には、本地堂が建立され、末社に祀られていた熊野十二所権現を本社に合祀したと伝わる。

本地堂は今も熊野神社境内にあり、平安時代の本地仏 9 躯が伝えられてきた。また、炭化して原形を留めない焼損仏も残されている。これについては、廃仏毀釈の際にあえて 1 体を焼くことで、多くの像を救ったと地元では伝えられている。

熊野信仰は、11 世後半から 12 世紀末の院政期に盛んとなった。当地に熊野神社が勧請された背景にも、熊野信仰の隆盛があったと考えられる。熊野の本地仏をこれだけまとめて伝える例は少なく、非常に貴重である。

収蔵品展「栗東の歴史風土をさぐる－金勝寺文化圏の諸像－」
栗東歴史民俗博物館
平成 23 年 9 月 17 日～10 月 23 日
滋賀県栗東市小野 223-8
077-554-2733
hakubutsukan@city.ritto.lg.jp